

早乙女太一

佐渡特別公演



日時 6月11日(土)

昼の部 午後2時開演 (午後1時30分開場)

夜の部 午後6時30分開演 (午後6時開場)

会場 アミューズメント佐渡 大ホール

入場料 S S席【指定席】6,000円

S席【指定席】5,500円

A席【自由席】4,500円

※当日300円増し ※4歳以上有料

☆チケットのお求めは アミューズメント佐渡・丸屋書店(両津)・曾我商店(相川)・ヤマゴ(金井)・本間書店(畑野)・池田屋商店(真野)・ホンマ衣料品店(新穂)・玉箋堂(羽茂)で好評発売中!

お問い合わせ アミューズメント佐渡 ☎52-2001

首都圏情報コーナー

佐渡高校野球部甲子園出場

春の陽射しの注ぐ中、去る平成23年3月26日、第83回選抜高校野球大会一回戦第4日第一試合、新潟県立佐渡高等学校は阪神甲子園球場に出場した。対戦相手は和歌山県代表、智辯和歌山高等学校である。試合当日、佐渡からは「往復貸切バス」27台に分乗して、佐渡高等学校関係者500名を始め多数の佐渡市民の方々、首都圏、新潟地区、関西地区、中京地区、長野地区、他から多数の方々が応援に駆けつけた。“人間力”の応援幕の翻る三塁側アルプススタンドは収容人員5,000人の規模であるが、試合開始時には“佐渡高校カラー・ブルー”の帽子、ウィンドブレーカー、メガホンで身を固めた応援者でほぼ満員の状態に膨れ上がった。試合に先立ち佐渡高校ナインの紹介が行われ、午前9時にプレーボールのサイレンが響き、佐渡高校鎌田侑樹投手が初球を投じた。一回表、強豪智辯和歌山に2点を許した。二回裏、佐渡高校の攻撃開始前には「佐渡高校校歌」が甲子園のスタンドに流れ、佐渡高校応援団は全員起立して声高らかに斉唱し、選手に声援を送った。四回裏、佐渡高校は初安打の遊撃手和田浩樹選手を一塁に置き、3番左翼手鈴木峻太郎選手が左中間へ適時二塁打を打ち三塁にて憤死するも、その間に和田選手がホームインして貴重な1点が入り“1-2”とした。六回4失点、七、八回にも1点ずつ奪われた。九回裏、佐渡高校は二人の走者を塁に出し追加点が期待されたが、最後に力尽き“1-8”で惨敗した。試合中の攻守交替時、佐渡高校選手はキビキビした動作を通して、全国に力強いメッセージを発信した。試合終了後、選手達は三塁側応援団前に整列して一礼し、球場を後にした。

(文責：佐渡市東京事務所 榎谷端夫)



溢れんばかりの佐渡高校応援団席



和田浩樹選手 ホームイン

随想

ゆや夢飛行

No.54

佐渡市長 高野宏一郎

想像を絶する東日本大震災発生1か月後の、4月6・7日に宮城県内の9つの島々を抱える4市町の被災地を訪問しました。当初島々には全く連絡が取れず心配していましたが、やっと連絡がつき、宿泊の予約が取れたので実現したものです。東北自動車道を延々と続く自衛隊の隊列と並走した後、気仙沼市内へ入ると異様な光景に目を疑いました。うず高いがれき、市内を覆う粉じんと臭気にマスク姿で、無言の被害者捜索作業が続けられていました。危うく被災を免れた市役所で市長にお見舞いをお渡しし、船便が復活したばかりの大島へ向かいました。

傾いた崖壁から乗りこんだ船は、まだ湾内に漂うがれきを避けながら、目の前の島へ40分もかけて到着しました。島は津波に洗われ、当時湾内で燃え盛った流出重油に焼かれて、7年前の訪問時の面影は全くありません。養殖と観光に携わる島民は、壊滅した施設を前に呆然と立ちすくむだけでした。市内では次の日、佐渡南ロータリークラブの炊き出しが予定されていた場所を確認し(八幡・銀杏の会は被災直後に仙台市内で炊き出しを行う)、翌7日、一時行方不明だった女川町長を対策本部に訪問、次いで石巻市内で既に活動中の佐渡市消防のエアートント基地へ、その後松島を抜けて浦戸諸島の被災状況を塩竈市役所副市長にお聞きするハードな駆け足視察でした。

当然島の被害は本土以上です。島々は本土の防波堤として津波の直撃を受け、唯一の足である船を失い、水も食料もなく10日も放置された島もあったそうです。そして、どの島も、船に代わる輸送手段を持たない悲哀を訴えています。佐渡市民からも義援金などを別枠で確保するなど、各団体に訴えているところですよ。

佐渡はこの後、ハザードマップの見直し、地域防災協定をはじめとした地域力の強化、防災情報システムの整備、過去の歴史の教訓から学ぶ防災訓練の見直しなど徹底した津波対策が必要ですし、島を巡って感じたのは方が一の命綱は空路などの代替輸送機関を整備することだと改めて実感しました。

(題字 高野宏一郎)